



情報科学センター長に就任して

江島 俊朗¹

情報科学センター長に就任して早いもので半年以上が経ちましたが、今から思えば準備不足の就任でした。それでも就任前には、情報科学センター（以後、センターと略記する）に関する知識を少しでも得ようと、センター広報誌のバックナンバーをダウンロードして読んだことを思い出します。創設時に思い描いたこと、その後に行われた先端的な試み、それらの活動の中で培われてきた価値あるもの、変えずに残して将来に伝承すべきことなど、当時の気概や息使いを感じ取ることができたことは大きな収穫でした。

年度初めに催された歓迎会において、甲斐次長はセンターと私の接点は VU プロジェクト（2000 年）に緊急参加したところであるとの指摘をされました。VU プロジェクトは全国にさきがけて e-learning 教材作りを組織的に行おうとするプロジェクトですので今でもはっきりと覚えています。特に印象に残ったのがキックオフ記念イベントにおいて講師の方が大学改革について語られた以下の行です。「組織をいまのよい状態に保ちたいと考えるなら常に走り続けること、環境に適応するために変わり続けること、そして自ら学習して進化できるかどうかが鍵である」

その後、大学が法人化され、九州工業大学にも沢山の教育研究支援組織が創設されいずれも精力的な活動がおこなわれています。このように大学内外の状況が大きく変化する最中であって頭をよぎったのが「センターも変わらなければならないの？」という問いであります。センターの現在の主な役目は

- センター計算機システムの管理運営
- センター計算機利用者の支援
- 情報ネットワークの管理運営
- 学内情報化の支援

を通して教育研究活動の支援をおこなうことであり、併せて全学情報化の牽引役として

- 情報基盤の設計維持管理
- 情報セキュリティマネジメント
- 統合認証などの学内情報化支援

¹情報科学センター長 toshi@ai.kyutech.ac.jp

巻頭言

などの役割も期待されてきています。求められているのは安心・安全で使い勝手のよい「情報基盤環境」であります。当然のことながら、「情報基盤環境」は情報システムだけでなく人的組織・業務体制も含みます。大学をより魅力あるものにして多様なステークホルダー（利害関係者）の期待に応えるために、質の高い教育・研究・コミュニティ機能を確保し促進することが必須の要件となっております。これらのことを情報基盤環境整備という観点からセンターとして戦略性をもって支援するためには、他組織との連携を視野に入れて機能的に動けるような人的組織・業務体制に自ら変えていくことも可とする構成員の意識改革が必要になります。

私の専門は画像処理、パターン認識ということですが、情報統合とか情報融合という考え方をよく用います。見方の異なる方式を組み合わせると相乗効果を期待する手法（情報統合）や異質の情報をあたかも同質の情報のごとくつなぎ合わせて表現力を向上させる手法（情報融合）を用いて処理性能の向上を図ります。異質のもの組み合わせ方は目的によって異なり、相補性の観点からそのつど変更が必要となります。これと似た考えに基づく組織のあり方に連携型（ネットワーク型）がありますが、他の組織と連携して、個々の組織から志を同じくする者、目的意識を共有する者だけが参加することによりチームをつくる方法であり柔軟性、機能性に富んでいます。これらの方法が今のセンターに適合するかどうかは十分な検討を要しますが、いずれにしても持続的に変化しつつ、高い水準で進化していけるような体制づくりがセンターの課題であると感じています。ダーウインは「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢いものが生き延びるのでもない。唯一生き残るのは変化できるものである。」という有名な言葉を残しております。情報科学センターも変わっていかねばと思います。An unsung hero もときには歌われるようにするためにも。